

～ セピア色の風景 ～

## 「授業参観」

青田 茂雄

仙台建設業協会専務理事

私には、いわゆる授業参観の緊張の記憶がない。

わが家は年中忙しかつた。

本業稲作、副業養蚕の家だった。田んぼの春夏秋は、田植え、田の草取り、消毒、稲刈り・稲束干し、冬は田起こし。後年機械化されたが、当時はほとんど手作業。そして稲を育てる時季を同じくして養蚕だった。ハルコ（春蚕）、ナツコ（夏蚕）、アキコ・シユウサン（秋蚕）、バンシユウサン（晩秋蚕）、バンバンシユウサン（晩晩秋蚕）と年4〜5回あった。

養蚕は完全に手作業だった。父母、祖父母の働き手四人は、まさに寝ている時間以外は働いていた。加えて農業・養蚕はお天気勝負、雲行きが怪しいと予想されれば、家族総動員令発布で、子供たちへは「手伝え」はあっても「勉

強しろ」の言葉はなかった。

私の記憶にある限りでは、

小学・中学・高校の時代に親が学校に来たのは、母が小学校の時に3回、中学校の時に1回、父が高校の時に2回である。詳しくは順に、母が入学式、授業参観、学芸会、運動会。父は、入学式と卒業式である。これは、姉二人、兄一人いづれもこの程度だったと思う。

物心つく頃から、わが家で繰り返し聞かされた言葉が「おらい（わが家）は忙しい（家）なんだ。一生懸命働かないとふくしく（裕福）なられないんだ。家族みんな働かないと駄目なんだ」と。当然、親は学校に来られない、来ないものだと思いついた。母は「小学校の入学式に行つたとき、担任の先生にわが家は忙しいので、親はほと

んど学校には来れませんと言うしかなかった」と苦笑いつていたのを覚えている。

仕事一途な父自ら、「（学校に）たまに、行ってやりたいもんだ」くらいつぶやいてくれば、母も救われただろうし、まして父から「今度は行ってやれ」のひと言でもあれば。

私も自分の子育てをとうに終えたのだが、幼少の私自身が「たまには学校に来てくれ」と駄々の一つでもこねればよかったと思う。

どんなにか母は、学校で過ごすわが子の姿を見たかっただろうと、半世紀前のセピア色の風景を見る。

●あおた・しげお 1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める